

少しでも学校経営や自分の生き方に生かせないかと、一流企業のトップや企業人、プロ選手や指導者などから学ぶようにしている。日本の一流企業と言えば、トヨタである。トヨタには、日々の知恵と改善により、ものづくりの場を高めていくために、繰り返し言われている言葉がある。

一つめは、「者に聞くな、物に聞け」である。者とは人のことであり、物とは現場や商品・製品のことである。現場の作業員から聞いたことと、実際に現場で起きていることが食い違っていることがよくある。だから、管理監督の立場にある人間は、部下からの情報に頼り切るのではなく、実際に自分の目で現場を見て、何が起きているかをつかまなければならない。

二つめは、「やってみせ、やらせてみて、フォローする」である。やらせてみてまでは実施しても、その後のフォローするまで徹底している会社はほとんどないのではないか。教えたことを本当に守り、実践するまでフォローすることが重要なのだが、実際には、たぶんやっていますというレベルにとどまっているケースが多く見受けられる。教えたとおりにやっていますと言い切れるところまできっちりフォローしていかなければならない。

三つめは、「あなたは誰から給料をもらうの」である。現場では、目先の問題に振り回され、事の本質を見失ってしまいがちである。この質問に対して、上司の名や会社をあげるのではなく、給料はお客様からいただいているということを出発点にすることで、品質やコストにも気を配ったお客様第一主義のものづくりが実践できる。

四つめは、「陸上のバトンリレーのようにやりなさい」である。陸上のリレー競技では、前の走者から次の走者へとバトンを渡すバトンゾーンがある。そのゾーン内であればどこで渡してもいい。バトンゾーンを有効に使うことで前走者と次走者の引き継ぎが円滑になり、全体のタイムを縮めることができる。

これは仕事も同様で、例えばベテランから新人にバトンを渡す場合、ベテランはバトンゾーンのギリギリのところまで走って新人を助けてやればいい。バトンゾーンがあることで、自分の範囲を超えて仕事をしたり、アクシデントが起きたときには逆に助けてもらったりできる。お互いに自分の領域を少し超えながら、助け合ってリレーを走ることができる。

これらは、ものをつくる会社の話であるが、そのまま学校にもあてはめることができる。一見あてはまらないように思えることでも、その考え方は使えることが多い。トヨタには社風というものがあるはずである。学校にも校風というものがある。

それは、今までその学校に勤務してきた先生方が、そのときそのときで、子どもたちのことを第一に考え、地域性を考慮し、自分たちにできることは何か、自分たちがやるべきことは何かと考えてきた結果であろう。代々受け継がれてきた“バトン”であるとも言える。

トヨタをはじめ一流企業には、そうなるべき何かがある。それを知ることは、大事なことである。学ぶべきこと、役立つこと、考えさせられることが多い。